

# 'The Recent Revolutions in Japan' 再考 (前編)

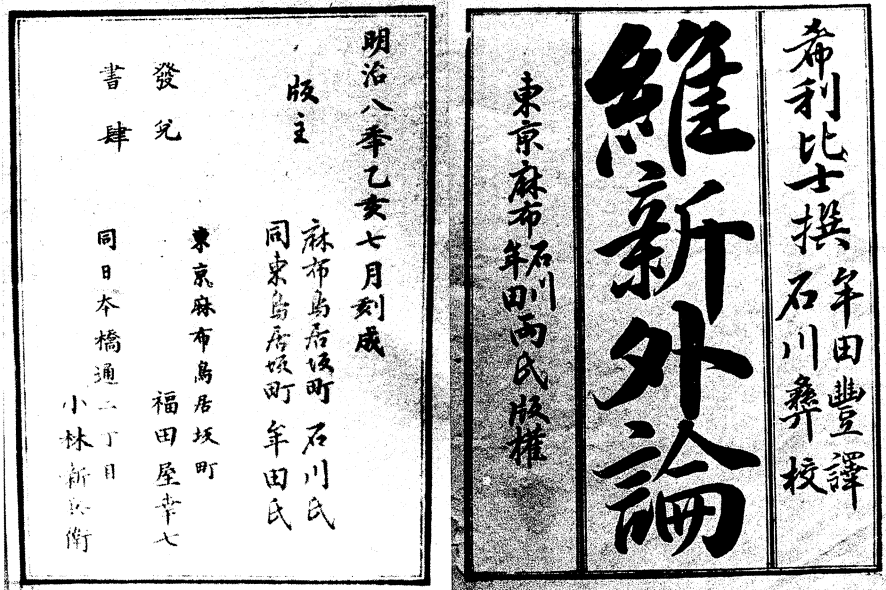
山下英一

表題を文字通りに訳せば「日本における近年の革命」となる。この英文の執筆者はW・E・グリフィス(1843-1928)である。

ところがこれには「維新外論(明治8)」「日本近世変革論(明治15)」といった2種類の翻訳本がある。そして筆者はそれぞれ何を言っているかについて発表した。2種類あるが訳述したのは肥前藩士牟田豊であった。牟田は始め「維新外論」を7年後に「日本近世変革論」の表題で出版した。

訳の題名で見られるようにこの訳文は意識の傾向が強い。出版にあたり牟田は原文になが内容から上巻と下巻の2冊にした。即ち文章の流れから見て発端 史畧 論議を上巻とし、顛覆 復古 成業を下巻とした。書物は和綴りで巻之上32丁、巻之下33丁の2冊になった。他にグリフィスに希利比士という字

三『The Recent Revolutions in Japan』再考(前編)



を当て、「日本近世変革論」の定価が上も下も金五十匁したことを付け加えたい。

後故アリテ世二公ニセサリシ」とある。その如何なる故かについて2つのことが考えられ

「The Recent Revolutions in Japan」がグリフィスの日本に関する最初の論文であり、「維新外論」はグリフィスの文章から最初の翻訳本であった。このことがそれまで暗中模索できたわたしのグリフィス研究の大きな一歩になった。というのは「The Mikado's Empire」「皇国」出版(明治9)の前年に発刊されていた。その上この本の第一部終章XXVIIIにこの論文が来ている。あたかも心臓部の働きをなしているではないか。

ここに奇妙なことが分かった。「維新外論」は上巻だけが発刊になり下巻は未刊のままになっていた。それから7年後に「日本近世変革論」に改名して上下が刊行されていた。こうなった経過について後者上巻における訳者の緒言に「此譯書ノ第一卷ハ曩ニ一度之レヲ上梓セシト雖モ爾

る。まず同書奥付きに「明治十四年十二月廿七日板権免許」とあるのを見ると版權無免許が問題にならなかつたか。次に「The Recent Revolutions in Japan」を「The Mikado's Empire」に入れるとき、その全体の記述に沿わずために言葉の加筆や削除や修正などがかなりあったので、その違いに気づいた以上その刊行に二の足を踏んだのであろう。

しかしそうと知って牟田が「The Mikado's Empire」のなかのXXVIIIの論文に手を触れた様子はない。余談になるが、こちらの英文をXXII「The Growth and Customs of Feudalism」も入れてテキストに組んだ翻刻本がある。しかし省略などのある粗末なものだ。「The Growth and Fall of Feudalism, Modern Revolution of Japan」 by W. E. Griffiths, A. M. (1890)。出版社はTokyo Z.P. Maruya & Co.丸善商社書店& Keigyosha 敬業社。

牟田 豊の翻訳になる原文は1875年4月発行の雑誌The North American Reviewに発表された。ポストンにあるその会社からニューヨークに住むグリフィスに原稿料100ドルの小切手の入った手紙が届いた。

The North American Review (1815-1940) はポストンで設立され、19世紀、20世紀の合衆国の文芸界をリードし、のちにニューヨークに出た有名な雑誌社であった。

通り一遍では済まされないのが歴史の勉強ではないだろうか。歴史は魔物である。いつまでもこだわる。ところがこだわりが少なくても済むものに歴史上の年表があると思う。そもそもこの年表なるものの歴史はいつごろ始まったのか。米国人でプリンストン大学の歴史学教授マリウス・B・ジャンセン博士(1922-2000)の『日本』(原題「Japan and Its World」)を久しぶりに手にして考えたことである。これは博士が1975年に行つたさる記念講演であった。日本における洋学發達の歴史から始め、話の途中に来て「1870年代の使節たち」というところは博士の内なる高揚を感じる。

1871年11月、特命全權大使岩倉具視の率いる使節団47名が米欧視察と条約改正のための外国交渉の大旅行に出発し、1873年9月帰国した。各国の事情の下での見聞を佐

賀藩士久米邦武は「特命全權大使米欧回覽実記」(1878)に記録として残した。特に長期間の滞米から団員自ら感じとつたと思われることのなかに自主独立の精神の育成、中央政府重視の政治体制、連邦共和制度についての感想があった。その日本における具体的な変革の例にキリスト教禁令の撤廃があった。

そこで思ったことはジャンセン博士の話の年表的に進んでいくやり方は相対的な視野にたつて客観的で分りやすい。そして締めくくりに岩倉使節団が帰国後に起きた様々な日本変革に関係のある1873、1874、1875、と続く1870年代の何ページかなる年表になった。われわれはハーバード大学の歴史学者人江 昭の次の文章を知っている。「世界史の流れでいえば、むしろ1870年前後のほうが、転換期と呼ばれるのにふさわしい。」そしてまた入江教授より、ジャンセン博士より1世紀昔のウイリアム・E・グリフィスがいみじくも声を大にして呼びかけている。グリフィス自身が「The Japanese Nation in Evolution」(1907)の中で日本で生活した年代の1870年から74年を転

換期年 (the epochal years) と呼び、もっとも重大な時代 (the most pregnant years) とみなしていたことも。

昨年6月に筆者は『グリフィス福井書簡』を上梓した。この書簡は1871年福井に雇われて藩校の教師をしていて故郷フィラデルフィアの家族、主として姉マーガレットに宛てた手紙ばかりである。内容は日常身辺の出来事をできるだけ伝えて家族を安心させる、と同時に家族の様子を知らせてもらって寂しさを慰めるといった平凡なものだが、それが返って人情味にあふれ、読んでいて好感がもてる。

ところが或るとき通り一遍がまかり通らぬ事態のあることを知った。グリフィスの手紙についていえば伝えようとしてそれが出来ぬことはないか。それともあえて伝えるのを避けることはなかったか。もちろん紛失といった穿った見方もあるが。もともと無いものはないのだから未練がましいことはいわないのが歴史をやるものの常識だと一蹴されるかもしれない。役人の監視のもとにあるというようなとき、書くと相手に迷惑をかけるときが

あるだろう。そこで問題にしたいが、福井のグリフィスはこれだけ新政府を挙げて決行した岩倉使節団のことは全く何も知らなかったのだろうか。

その前に小さな例について考えてみたい。明治3年9月、福井藩府中で武生騒動と言われた藩内事件が起きた。府中の者が福井藩に逆らって打ち壊し、火つけを働いた。藩籍奉還によって府中の家老職が華族に列せられないのを不服とした騒擾であった。福井の獄舎に火つけ容疑の2名が囚われ明治4年4月3日斬首の刑にあうという痛ましい事件で府中の町は大いに荒れた。グリフィスが福井の城下町に着いたのが明治4年3月4日、その前日府中に泊まり街を歩いて日記に記す。  
‘Poor place, ancient importance declined, rebellion.’ しかしこれらの情報をどこまで知っていたか。それとも‘The Mikado’s Empire’ 第2部第7章で府中を ‘It was a poor place.’ と書いただけでそれ以上騒動に触れない気持ちがあったかも知れない。いみじくもその後に見える ‘Familiarity was bleeding contempt.’ (親しい仲にも垣をせよ) という

文句に書くことを遠慮する気持ちが忍ばせてあると見てのことだが。

それで岩倉使節団に戻って同じような問いかけになるが、福井ではグリフィスはまるでつんばい敷敷の人であったと思いたい。実際に答えるにはいろんな雑念が入り乱れることは必至である。いっそのこと岩倉使節団が最初にグリフィスのどの文章に現れるかを見極めるべきであろう。もっとも考えられるのは ‘The Recent Revolutions in Japan’ にあると思うが残念ながらここにも無くて、‘The Mikado’s Empire’ 第1部第28章の終りにきてはじめてお目見えすることに相成った。つづけて第2部18章で再びその意味を問う文章があつてようやく新時代の曙光を見る思い。こうして歴史のパスセジが道を開く。

船の時代であった。フィラデルフィア生まれのグリフィス少年は市に沿って流れるデラウェア河の米国海軍工廠のドックで父のひざに乗って蒸気船の進水式の開始を待っていた。1850年4月6日午前8時35分、後のペリ―提督の旗艦サスケハナ号の優美な船体が浮

かんだ。父はいきなり少年をひざから降ろすと立ち上がってヒップ、ヒップ、フレートを三度叫んだ。1860年、ワシントンからフィラデルフィアに着いて条約批准交換のために使節新見正興の一行が市中を歩くのを見た。米国内は蒸気機関車の鉄道で移動したが、ニューヨーク訪問を最後にナイヤガラ号に乗り組み帰国の旅に着く。

思うに少年、青年を通してこのような経験をもったことも日本へ行ってみようという夢につながったと思われる。グリフィスがこの夢の実現のために日本に身を置いて日本人と接し、かれらの幸福のために飛躍する。それはまた未来に橋を架けることにもなる。学校掛りの大参事村田氏寿による十二分の待遇にもかかわらず福井を去らざるを得なくなつて前途多難を覚悟のうそでもらした What shall the future be? のいふやめを追つてみたい。

東京に出て理解しうる友人同士になつたと見えた人物に中村正直 (1832-1891) がいた。互いに相手をどう思つてゐたか。① 「グリフィスが『The Recent Revolutions in Japan』たぢづい」中村は教師として論文を書

くばかりか翻訳もかなりあつてジョン・スチュアート・ミルの『自由之理』「サムエル・スマイルズの『自助論』はよく読まれている。キリスト教と宗教の自由に関する中村の建白書が天皇や朝廷に深刻な影響をおよぼして極端な神道主義者の台頭を阻止した。」② 「グリフィス福井書簡」英学者中村は「The Mr. Kado's Empire」の執筆に協力している。東京日記の1874年3月〜4月に中村の名が規則的にある。「Spent the afternoon with Nakamura. Evening wrote IV chapter of my book」たぢづい、中村が相談に立ち会つた。③ 「K. Nakamura's letter to Mr. Griffiths」 Dear Sir, I have not seen you long time since, & have heard you are busy to pack your goods so as to go back your home. I return "The Japan Weekly Mail" which you lent me & for which I thank you very much. The bearers being the hired carriers, I send them to your house to carry the bureau, which belongs to your Cochran, to my house. Be kind enough to deliver it to these men. Knowing that you may not come regularly to my

house, I send back the catalogue of Jap. Authors. But if you would come again & again to my house taking this book, I shall be of course very glad. Yours respectfully. ④ 「グリフィスから中村正直に渡つた本」 J.C. Horten: The Slang Dictionary (1865), M.Hopkins: The Law of Love and Love as Law (1870), L.P.Hickok: A System of Moral Science (1871), A Graduate: Paul of Tarsus (1872), H.T.Buckle: History of Civilization in England Vol. I (1859), Fouque: Undine and Other Tales (1870), T. Rogers: Social Economy (1872). ⑤ 「日本近世変革論序 明治八年敬宇中村正直撰同十三年天長節書」次頁。これをみても分かるように「たぢづい」の中村とグリフィスは友情で結ばれた兄弟のように見える。とりわけ1874年のグリフィス帰国のおたりの中村の気の使い方や思いやりの心は美しい。序文のなかで中村が紹介する弟分についての感想は特別にいいものである。静岡学問所教授から1872年大蔵省に出仕するため上京してきた中村は、福井を出て開成学校教師になつたグリフィスとはたがいに

日本近世愛華論序

希利比士在美國時教授勝海舟君長子既福井藩求長師希利應召至至則訓迪鄉子弟忠厚純摯造就有法材俊技藝之士多出焉及東京為開成校教師與余時常往來相得甚驩也嘗謂余曰貴國億兆之民盡是天子之臣屬

也如吾則雖孑然住此遠遠之邦而亦儼然自主之民矣而占有美國之公矣余聞之意雖不憚而理未有以難之也希利性雖忠厚而過于抗直會與二部員議不相合一旦忽然而去臨別曰吾愛日本人故雖不得意而去而親全國之心不為少減也余聞之雖喜其情厚而亦以竊愧焉希

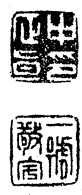
利去後寒無消息近於新聞紙知其該游各地講說日本事聞者雲集今又茲編

至而牟田有秋澤之竟功其友人某為余叙余讀之如達希利面目鬚眉聲音笑貌躍活現紙上矣因憶臨發前數月希利屢訪茅舍叩以種事余不能應答如響而希利則把筆疾書如飛手腕殆疲

而尚不已也嗟夫希利雖在他邦而自言占有本國之一分其自任之重如此則何怪乎其於日本事情勤探聽而審思察以能作是書責其國人也哉異日我邦人之往歐米者其占能占有日本之一分能察彼文明之原委有所著作乎否能免于「知半解忘本逐末之弊乎否能洞觀外國

情態發為論說如燈屏燭怪如秦鏡照妖以資益吾邦乎否刻告竣遂書之以問世之好遠游者

明治八年敬字中村正直撰同十三年天長節書



き来して学びあつた。グリフィスの言葉で「貴國は人民がごぞつて天皇の臣下にあるが自分は自主の精神を持った国民で米国人の一員としての自覚がある」。忠厚であり抗直であつた「グリフィスは再契約の話が合わずにわかに帰国する。別離のさみしい思いにかられた中村は、「わたしは日本人が大好きです」とのグリフィスのことばに心を打たれた。「占有美國の一分」「占有日本の一分」は個人尊重の精神が英学、漢学の学者に強くとらえられて心に深く響いた。

二人は明六社同人でもあった。この別れの年に中村はG・コ克蘭から受洗した。[Cochran (1834-1901) カナダ・メソジスト教会宣教師。1873年来日。東洋英和学校の創立者であり、多くの日本人伝道者を輩出した。]

年表的視野から歴史の移り変わりを事項中心に見るのでなくむしろ歴史の上に立ち止まって世のなかの様子について考えてみたいと思つた。最初になぜ岩倉使節団に関する記事が日本の歴史に関するグリフィスの最初の論文『The Recent Revolutions in Japan』に見当たらぬか。しかし踵を接するようにして出版された『The Mikado's Empire』の第1部最終の論文、これは周知のごとく前記の論文に必要な修正を施したもの、第2部の終りの章で日本の未来 (future) を約束する明るい文章となつて続く。

では一体、これら2つの論文はどういう歴史の流れを書いたものか。それには著者自身による推敲の問題も決して無視するわけにはいかない。日本人と天皇(ミカド)、「宮殿か

ら乞食小屋まで日本のことでわたしの知らないことはなかった」と豪語したその人脈、明治の精神、仏教とキリスト教など、どれひとつとらえてもその後のグリフィスの日本観に通じる新しい芽生えがこの論文にはある。それについては次回に続くことをお許し願つてついに『The Recent Revolutions in Japan』(『The Mikado's Empire』第1部第28章) 試訳の1回分(2回分のうち)を掲載したい。

### 訳文

米国と欧州で一般に思われていることは将軍(大君)の政府が倒れ、御門(ミカド)が政権を取り戻した。そして封建制度が廃止になつたのだと。その直接の原因は日本に外国人が駐留したからという。日本に住み、日本人の考えを良く知ること、又は国の歴史を研究していれば、誰がそんな意見に賛成するだろうか。外国人の新しい考えが日本の2つの政府を転覆させるきっかけになつても原因でない。外国人の駐留は転覆の不可避を早めるのに役にたつたに過ぎない。

この章は日本における近年の瞠目すべき変化の真相解明にある。この変化の原因は国内の3つの政治改革である。すなわち外国人にたいする徹底的政策の変化、欧米の理想の採用、社会革命の希望的始まりを指す。これらの原因は外側よりも内側から起こるものである。言い換えれば衝撃からではなく衝動が原因であつた。それはおおむね知的であることを証明しよう。

ペリー提督の到来という出来事により明白なことは歴史のもとにある明確な動きだろう。論理的な関連の動きもあれば他と全く異なる動きもある。その意図的效果とは、

1. 将軍の失墜と家臣にふさわしい地位の格下げ。
2. 正統な天皇による最高権力の復活。
3. 封建制度の廃止、古代天皇制の復帰。
4. 仏教の廃止、国民的信仰と政治的原動力としての純粋な神道の確立。この4つの動きには歴史的、論理的に関連があつた。
5. 「夷荻」の排斥、世界各国から独裁的孤立。
6. この狙いの放棄、西洋文明の採用、国際礼讓に加入。

1、2の起源はいまから150年前の昔のこと、3と4

はざつと過去百年内のこと、5と6は現在に生きる若者が主に記憶を重ねて發展の衝動にかられることになるに違いない。

ペリーがやって来るはずいぶん前に遂行すべきことがはっきり分かっていた。それは熱心な思想家の胸中にあつた。二重構造の政治のもとに生きるとは近くの山に雪があつて不満の冬がいつまでも続く。しかし春になればこんどは洪水だ。ペリーの江戸は時期外れの雪解けか、2月に暑い南風が吹くようなものであつた。雪が解ければ川は増水し、將軍と封建制度の砂上の家を押し流すであろう。しかし腐り過ぎたり、虫に食われればなしの家の譬えが暗示するような大崩壊にはいたらずにすんだ。天皇の古い方舟が浮游してきて権力の座に就いた。仏教は破壊にあつたが岩の上に腰を据えた。ペリーは契約の基本を土台に打ち込み繋いで以前より態度が毅然となつた。洪水は満を持して新しい流れといつしよに新しい水路に逸れていった。過去の重圧に挑み常に不可能に向かつて過去の傾斜をかけのぼるのは止す。すると洪水は友誼親睦の大海と

なつて諸国の川に繋がつた。

この動きの主なる原動力は知識の力であつた。鹿児島や下関における外国船からの砲弾の衝撃も、日本に要求する重く不正な賠償金もこの10年のできごとを自己満足だけに終わらせない。日本にいる英国人作家が「家康の遺訓」を制定し、翻訳して言うには「その制定の下で日本は覚えている限り統治され、その後は高い文明の抗しがたい出現に取つて代わつた」。明らかに2つの政府と封建社会の崩壊は欧米の高度な文明と接触した結果であつた。

日本が封建制度を廃止したことを褒めて言われたり書かれたりする。さしずめ「一筆」といつて「それを成し遂げるのに欧州は数世紀かかった」。第3者は大日本を欧米の古い教科書や百科事典、あるいは住んだことがない人の書いたものを読んで知っているくらいで、国政術で日本の半神半人を想像して米国の新聞はこれらを貴族にするとか…これではめまいを起こしかねそう。わたし(グリフィス)は封建制度の廃止のあたりに大名の首府に住んでいたこともあ

つて、こういう比較を聞くとアイルランドの初年兵は敵の首の代わりに脚ヲ切り取つた訳が知れるというもの。崩壊前から日本の封建制度は墓の用意が出来てあつた。將軍を打倒してその制度を首のない胴体にし、その脚を切り取り、胴体を埋めるのは簡単であつた。これは事実、天皇の政府でしたことでありこれからそれをおみせする。

近年における米国の内乱をサルター岩の始まりをもつて、或いは1851年の「妥協の約定」とともに理解しようとしても無駄なように、ペリー到来の出来事のみをみて現在の日本を理解しようとする人は騙される。1868年の重要な發展は過去数世紀の中からその根源を見るべきである。

頼朝の活躍は平家に始まつて長く続いた横領の全盛をもつて現実とする。頼朝は軍事上の必要から頼まれて横領の大將になつた。紀元1184から1199年にかけて政治の二重制度が始まつて、それが世界の政治上の謎になつた。これはケンペルも、出島のオランダ人にも、ポルトガルのイエズス修道士にも分かつていなかったようだ。

米国の百科事典や教科書に「2人の皇帝」の1人は「精神的」、もう1人は「世俗的」という無分別なことを誤って書きたてた。

このために機敏なペリーとその後継者たちは下役人と契約を結ぶことになった。日本からの外交文書が予言、創作、ため息混じりの大変面白い読み物の生まれるものとなった。日本のリップ・ヴァン・ウインクルが3〜4人、日本語と英語で「大君の復権」を語っていて、その見事な誤りをそのまま残してくれている。日本はたった1人の天皇しかなく、將軍は軍事的横領者であり、「大君」という大袈裟な称号は外交上のごまかしであった。頼朝の政治がどのようにに北条、足利、徳川によって受け継がれたかを見た。王位と陣營の分離を永久に完了した諸侯もあつた。將軍が天皇に謁見のために京都に行く慣例は家光を最後に消滅した。江戸において偉大な司令官の敷く武威厳然とした政治が日本中で感じられた。数世紀にわたる戦いの後に完全な平和が訪れた。学問が盛んになった。芸術は花開いた。幕府の政治機構は完全無欠であつたの

で、天皇の権力は影のように薄く見えたが実際には外国人が想像したよりも極めて大きかつたのである。

江戸と京都に国の統率者の將軍と畏れ多い皇帝の王室の2人の支配者の住まいがあり、それぞれの地位を象徴していた。皇帝（ミカド）は周りを漆喰壁で閉ざした庭園の館に護衛を置かずに住んでいた。その都で暮らしを質素にし、高い身分の純血な貴族、歌詠み、物書き（文人）、学生、僧侶が集まる場所が選ばれた。また古い歴史、神社仏閣、庭園、優美な振舞いの人たちで有名な都市であつた。將軍は守備国の要塞の城に住み、そこから広がる武將、封建藩主、士族の群れからなる都市を見下ろす。庶民感情をもっとも正しく表わしている警句がある。「だれにも怖い將軍、だれもが好きなミカド」。

政策を実行し、キリスト教を排斥した家康の後継者は国内から外国人を一掃し、海に出る門の門を閉じて、あらゆる混乱の原因を消すための計画を実行し、困難な生涯にかかる労苦が生んだ果実というべき平和

な状態を不動にするところまで来た。後継者たちは家康の子らをクロノス（不明）に食われないよう慎重であつた。

家康の後継者の案によれば、国の知性によって古代中国における万里長城のごとく境界を決めるべきであつた。その一方で仏教集団という有力な原動力によってアジア集団の知性を潰すか潰しておく工夫をこらし、それが政治の見本であるとの援護を受けて、大いに奨励された。外国の思想はすべて憎むべしとの法令を發した。外国船をモデルに建てた船は壊すよう命令が出た。ジャンクより優秀な船の建造が禁じられた。キリスト教信仰、外国旅行、外国語の学習、外国習慣の受容、の代償は死刑であつた。將軍の堂々とした行列の前には2階の窓を閉め、地面に顔をつけてお辞儀をせねばならなかつた。將軍の茶瓶や摺鉢にさえ民衆は顔に屈辱の色を浮かべてお辞儀をしなればならなかつた。古代の歴史を調べることは將軍の起源を明らかにすることになるといけないので俗人には禁じられたが、身分の高いものには奨励されなかつた。厳し



い取調べのためにおおくの名人技の活力が枯れることになった。反対に内容を曲げて偽りの歴史を捏造制作するか、統率力のある諸侯をほめちぎり、政治の二重性を日本では最良で唯一の組織であると持ち上げるかした。不満に思う詩人、眉をしかめる追従者や歴史家すら現れない。この人たちは自由な感情表現を威厳のある統治者大君にならっていた。大君とは偉大な天子とあがめられる支配者、あるいは天皇にのみふさわしい。徳川將軍の欺瞞、残忍性、圧政に人気のある物語も芝居小屋では現時点から追いやられ、足利時代に設定の筋書きで表現され、実名も変わってしまっていた。これまで工夫された捕囚と圧迫の完璧な筋の組み立ては大名にただ従順でなんの役にも立たない者をつとめて騙すためのものであった。驚くほどたくさんの密偵集団が官費で雇われていた。そういう垣根のなかで政治そのものが巨大な偽物になって急速に成長し、公私ともにウソを付く癖とウソのつき方に欺瞞を流行らせ、ついに明らかに日本人がウソのためにウソを付くことが好

きになる癖がついてしまった。ペリー到来後10年間、神の国にきた外国人に日本人はウソをつくのが政治においても個人でも驚くほどうまく、他にない獨創性をもってどこでも性懲りもなく行われる。この結果、これが日本人の第一の人間的特性になった。外国人が獲物を狙う眼を見ると、權威の根源と將軍との本当の關係がばれないように役所の欺瞞を使うのにその眼に目隠しをする必要が生じた。それこそ目をくります万華鏡のように。將軍から土地と地位を貰った大多数の大名がミカドよりも將軍に追従する同盟のほうを信じた。実は將軍に土地と地位をもらった大名の大多数が大名に同盟のための手を結んだ。歴史を学ぶものから見るとそれは烙印つきの信念であった。平民はというと大部分は自信をふりかざす天皇(ミカド)の存在を忘れないでいてもなしの権力者の天皇が人間を治めるのを忘れている状態であった。公には天皇は神の姿をした人であると教えられた。記憶にある前から、戦時中の困ったときから、徳川が「偉大で優秀」であると知っているだ

けに江戸の支配者が神よりも安定していて、親身になってくれると知らされた。

家康に始まる歴代將軍が日本で最後の軍勢力を保持し続けるだろう。日本人の場合、約270年平和が幸福に続いたのは將軍のお蔭である。その者たちの強固な支配の下での二重形態の政治は盤石にみえた。同時に封建制度は永遠の安定を見せていた。欧州の封建制度を覆した原因になるものはなく、起こること自体不可能だった。教会、帝国、自由都市、資本主義などは存在しなかった。人民は8つの階級が満足と幸福を保った。肥沃な土地、温和な気候は無尽の食糧をもたらした。中国分讓の歴史的要因は取り除かれた。商業がないので莫大な富の蓄積がない。したがって商人の気持が外国人と上手に取引して専制政治の危険な領域にまで広がることはなかった。いみじくも学問、教育と呼ばれるほどのものを受けられるのはサムライに限る。刀の特権はサムライだけのものであった。江戸における政治機構の完成が目論見たように大名は貧しく互いに疎ましい状態にした。大名が力

を合わすことをできなくした。大名2人が探偵なしに私的に会い、訪問しあうことは許されなかつた。徳川家8万という莫大な数の武士集団は尾張、紀伊、水戸、越前といった將軍と姻戚関係のあつた豊かな藩と莫大な収入に蓄積源が後ろについて、徳川家すなわち幕府または封建体制の転覆は多くの人が信じたように人道上不可能なことに見られた。

けれどもこれらのことがすべて数か月で破滅したのである。幕府はもはや過去がひく影に過ぎない。徳川家はかつて諸侯であり封建君主であつたが、その手は筆と刀や他の道具にしか触れたことがなかつた。それが今は曖昧模糊とした貧乏暮らし。幾千となく茶を摘み、紙を漉いた。かつては所有地であつた田んぼで、軽蔑していた労働者のように田の泥土を掘り起こして心身を養つていた。久能、芝、上野、日光にある先祖代々の墓はかつて最も神聖な匂いがしていた。華麗な飾りの廟はその興味を失つて朽ちてしまつてあたり一面は荒廃して見えた。地下の廟にいつも静かに眠る墓の住

人が突然に昼の明りに晒されたようだ。250名の諸侯が土地、主従の繋がり、収入を諦め、前の召使に別れをいうと東京の私生活に退いた。もはや静かに死を待つ身であつた。「忘却という歳月の岸辺に打ち上がった死骸」そのものである。

この3つの明白な結果の何が原因であつたのか。1868年の洪水を起こした水が最初に集まりだしたとき、幾世紀にわたる指標を一扫し、古い状態の船を移し、新しい船員に機械を備え、あたかもノアの洪水のとき、方舟がエンジン、蒸気、スクリュウを備えたかのように、近代思想の流れに船を進水させた。この動きを理解するには思想の流れとそれを生んだ人たちについて知らねばならない。

以前は日本に多くの階級があつた。第1の階級は宮廷貴族と京都の文人であり、第2が僧侶であつた。僧侶はあれほどの量の仏教文学を日本に入れ、またインドの大乗仏教の教義を導入、発展させ、かつて世界で最も広く公表された宗教の幾重にもなる発展から明らかに思考と暮らしのうえで日

本仏教にとつて為になるものを産出した。この知的活動と宗派的成長は16世紀に絶頂に達した。その頃から日本人の武士が先導するものとなるが、そのなかに神道の祭司も入る。近代日本の島国の知的活動は18世紀の後半から19世紀初めにかけて25年で頂点に達した。17世紀までもとつて古代史の研究者は二重政治の本質をはつきり理解し、將軍は人民が無知の間は存在すると分かるようになった。

その頃から仏教は教育を受けた武士や平信徒の階級の知性を掌握しておれなくなつた。中国の学問、とくに孔孟の論語が復活してきた。仏教はもはや倫理を移植されるようになつた。この結果が朝鮮の全国的な侵入になつた。というのは明朝の転覆によつて中国から逃げてきた数人の学者に大きな刺激を受けていた。北京陥落と蒙古接近の2次的影響は13世紀の欧州でコンスタンチノー陥落のためギリシャの学者が拡散したのに似ていた。ミカドと將軍の関係が謎めいていたので、大抵の父親は「日本で一番偉い人は誰ですか」と子が訊く無邪気で

まじめな質問にうまく答えられなかった。

「5つの関係」即ち、帝と臣、親と子、夫と妻、兄と弟、友と友、という孔子の道義の研究があつて、中でも家臣が領主に従順なことがまず一番に大事だという。これが長いこと武士の間の曖昧な関係を回復し明らかにならなければならない。この精神が幕府の失敗に伴つて高まり、改革の狼煙を合図に「官軍を勝利に導く雄叫びの大義名分は「王と家臣であつた」。これによつてたがいには持っている仕切りを元に返して將軍は天皇に対して、家来という正しい関係に戻るべきであることを理解した。水戸藩は学者が数、能力、活動にかけてどれもとくに有名であつた。その藩には中国から逃げてきた学者が住んでいた。古典は日本人学者の産物でこれは世論の形成に有力な影響を与えた。学者らはテキストの校正を中国の学者に任せた。2代目水戸藩主(1622~1700)がアーネスト・サトウ氏の指摘のように「1868年の改革に行き着く運命にある現実の作者」と考えられる。藩主のまわりに日本全土から多く

の学士を集め、大日本史「History of Japan」の編纂を開始した。それは完璧な国語で書かれていて、ラテン語の欧州の学問に対していた。全243巻。バンクロフト氏の『アメリカ合衆国史』にほぼ相当する事柄で埋まっている。1715年に完成。

たちまち古典と呼ばれた。勤勉な研究が原稿状態で熱心な研究者の筆写を経て、ついに1851年、その要求の拡大に応じて出版に漕ぎつけた。この書の傾向は水戸の多くの出版物のように人心をミカドに向けるのが狙いであつた。このミカドは唯一真の權威の源であり、將軍は軍の統率者であつたという歴史的事実を指し示すことになつた。水戸は徳川家の近い姻戚であつたので、他のどの学者に許されたであろうよりも自由に意見を述べることが許されていた。水戸が始めた仕事は有名な学者の頼山陽に引き継がれた。頼は20年に及ぶ絶え間ない労苦の後、1827年『日本外史』(「External History of Japan」)を完成した。この書で頼山陽は平、源、北条、足利、などミカド衰退の時代に政治力のあつた歴代の武家の

歴史を取り上げた。この仕事は江戸目付けの試練を通らねばならず、全巻に数冊の出版許可がなされて初めて完結した。この偉大な書物の誤りなき狙いはミカドが唯一真の支配者であつて、権力の根源を有し、ミカドによつてすべての日本人が一つ気持ちになり、同時にその徳川家さえ反逆罪の汚名を逃れなかつたことを示した。(つづく)

#### 付記

本稿は「The Recent Revolutions in Japan」の日本語訳を読者に提供するものが主なる目的であつたが、結局全体の3分の1にとどまり、残りは次回になつた。お許しを乞う。グリフィスのこの文章は今日の歴史学で普通のアカデミズムの傾向とは違つて、学生時代に楽しんだ米国人になじみの歴史家、プレスコット、レッキー、モットレーの文学性のある歴史に習うところがあることを覚えてほしい。筆者がこの論文について発表したのは「維新外論」考(北陸英学史研究 第1輯 1987)、「日本近世変革論」考(英学史研究 第25号 1992)の2篇である。中

村正直のことで次の著書をお薦めしたい。『評注ミル自伝』山下重一（お茶の水書房 2003）、

『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と

「西国立志編」平川祐弘（名古屋大学出版会 2006）。次回は牟田 豊の訳文の特色に

ついて、グリフィスが求めた日本人の人脈のなかの横井小楠、村田氏寿らのこと、明治の精神とは、日本人論、米国ではこの論文がどう読まれたか、などいろいろあるが、なによりも岩倉使節団についてグリフィスはどのよう to 評価したか、“The Mikado’s Empire”といっしょに其の時代にかえて考えてみたい。今はこのことが筆者のもっとも願うテーマである。